2018年11月18日

中原キリスト教会

　　　　　　　　　　　**「イザヤ書：苦難の僕（しもべ）」**

聖書箇所：イザヤ52:13-53:12

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　イザヤ書は預言書中の預言書といえる文書です。大預言書と通称されているのは「イザヤ書」「エレミヤ書」「エゼキエル書」「ダニエル書」の４つですが、イザヤ書はその最初にあり時代的にも最も古いものです。預言者は神の言葉を預かって、支配者や民に伝える役割をもった人物ですが、イスラエルの王やそのとりまきの人々に手厳しい批判をするため、王宮から遠ざけられている場合が一般的です。また、民族の滅びの預言をすることが多いため一般民衆からも嫌われていたように推測されます。しかし、イザヤは王家の血筋にある人物であった、ということもあり、王に直接ものを言える地位にあり、また王もイザヤの言うことを聞いておこうとしたと思われます。

イザヤが預言者として召命を受けたのは、ユダ王国の王ヨタムの時で、主に活動した時期はその子アハズ、そして更にその子のヒゼキヤが王であった時期です。BC740年―690年くらいの時期です。ヒゼキヤの次の王マナセによって鋸（のこぎり）でひかれて殉教したと伝承されています。彼の預言した時期は、アッシリヤの政治的・軍事的圧迫の時期です。BC735年、シリアと北イスラエルは同盟してアッシリヤに対抗し、ユダ王国にも共に戦うことを求めましたが、ユダ王国はこれを拒否したため戦争になりました。ユダ王国はアッシリヤに助力を求め、アッシリヤが派兵し、シリヤ・北イスラエルの同盟軍を粉砕してしまいます。そしてシリヤ、北イスラエル、ユダの三か国はアッシリヤの属国的立場に置かれました。ユダ王国の王はヨタムからアハズに変わりました。しかし、北イスラエルはアッシリアからみるといつ反乱を起こすかわからない国であったためついにBC721年ホセア王が廃され北王国は滅亡しました。ユダ王国は辛うじて生き残りました。その後継の王ヒゼキヤはエジプトの援助を得て、アッシリヤに対抗しようとしました。時のエジプト王朝はあらたに起こった第25王朝で、この王朝は上エジプト・エチオピアによる占領王朝です。そんなことをしても強国アッシリヤに対抗できる訳はありません。アッシリヤ王セナケリプとの戦争で一時は奇跡的勝利をえますが、最終的には反アッシリヤ同盟は失敗します。そのあとのマナセは政策転換し、アッシリヤに従属します。イザヤの時代はヒゼキヤまでですが、かれは終始一貫、政治的・軍事同盟に反対し、主ヤハウェ―の力に全面的信頼を置き、イスラエルの信仰を守るべき、と言います。具体的には、政治的に従属することになっても、宗教的自主性は断固として守る、ということを意味します。ナチスドイツの下で、信仰を守ろうとした告白教会の姿勢はこれに通じるところを感じます。

イザヤ書は1-39章までを第一イザヤ、40-55章が第二イザヤ、56-66章が第三イザヤと称せられています。これは内容、表現形式等から、三つの文書が異なる時期に書かれたのではないか、ということから分類されたものです。本日の「苦難の僕」があるのは第二イザヤのところです。イザヤの時代の出来事の記述のようなことはすべて第一イザヤの文書のなかにあり、第二イザヤ以降は「新しい出エジプトと主の僕」に関する詩文です。

第二イザヤ、第三イザヤが書かれた時期は良く解りませんが、第二イザヤはBC550-540の頃、と言われています。この時期は、ユダ王国はバビロニアによって滅ぼされ、ユダ王国の枢要な人々はバビロンに捕囚の民として連行され、バビロンで奴隷的立場に置かれました。しかし、それから約半世紀後、ペルシャが強力になり、あのバビロニアを滅ぼそう、とする勢いになってきました。ペルシャは宗教的には寛容策をとり、各民族の宗教を認める政策を採っていましたから、捕囚の民にも帰還の許可が与えられるかもしれない、というかすかな希望が見えた時代です。この第二イザヤの預言の中に本日の「苦難の僕」の詩（うた）があります。この苦難の僕の詩（うた）は、第二イザヤにある「主の僕」の詩（うた）の第四番目の詩（うた）です。第三イザヤの時代は第二イザヤに続く、バビロンから帰還した人々が神殿再建した時期と推測されています。ゼルバベルの指導の下で神殿再建が進められ、ハガイ、ゼカリヤがこの努力を勇気づけた時期です。追加的な主の僕の詩（うた）である第五の僕の詩（うた）を含んでいます。

第一イザヤの39章までで、有名な箇所を上げておきます。2:4に国連の建物に掲げられている戦争放棄・軍事力放棄の一節があります。「主は国々の間をさばき、 多くの国々の民に、判決を下す。 彼らはその剣を鋤に、 その槍をかまに打ち直し、 国は国に向かって剣を上げず、 二度と戦いのことを習わない。」と言われています。これはイザヤがユダとエルサレムについて示された先見の言葉、と書かれています。終わりの日＝主の日の幻です。7:14-16には「それゆえ、主みずから、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ。処女がみごもっている。そして男の子を産み、その名を『インマヌエル』と名づける。/この子は、悪を退け、善を選ぶことを知るころまで、凝乳と蜂蜜を食べる。/それは、まだその子が、悪を退け、善を選ぶことも知らないうちに、あなたが恐れているふたりの王の土地は、捨てられるからだ。」とあります。「インマヌエル預言」です。これは主なる神の主権を認めない王アハズにしるしとして示すと言われているものです。「見よ。処女がみごもっている。」の「処女（おとめ）」はユダヤ教側から批判されている箇所です。単に「若い女」というヘブル語をギリシャ語の「処女」を意味する言葉に訳したのは、キリスト教が処女懐胎を正当化するもので誤った訳だ、というものです。「凝乳と蜂蜜を食べる」の表現からすると、新約ではバプテスマのヨハネのことを指しているようにもみえますが。

9:6-7には「ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。 ひとりの男の子が、私たちに与えられる。 主権はその肩にあり、 その名は「不思議な助言者、力ある神、 永遠の父、平和の君」と呼ばれる。/その主権は増し加わり、その平和は限りなく、 ダビデの王座に着いて、その王国を治め、 さばきと正義によってこれを堅く立て、 これをささえる。今より、とこしえまで。 万軍の主の熱心がこれを成し遂げる。」とあります。所謂メシア預言の最初のものです。異邦人と言われたガリラヤに起こることとして言われています。

11:1-5「エッサイの根株から新芽が生え、 その根から若枝が出て実を結ぶ。/その上に、主の霊がとどまる。 それは知恵と悟りの霊、 はかりごとと能力の霊、 主を知る知識と主を恐れる霊である。/この方は主を恐れることを喜び、 その目の見るところによってさばかず、 その耳の聞くところによって判決を下さず、/正義をもって寄るべのない者をさばき、 公正をもって国の貧しい者のために判決を下し、 口のむちで国を打ち、 くちびるの息で悪者を殺す。/正義はその腰の帯となり、 真実はその胴の帯となる。」は二つ目のメシア預言と言われているものです。「エッサイ」というのはダビデ王の父親ですから、その子孫から、若枝即ち救い主メシアが出てくる、と言っているのです。この若枝という言葉は、すでに4:2に登場しています。「その日、主の若枝は、麗しく、栄光に輝き、 地の実は、イスラエルののがれた者の 威光と飾りになる。」とあります。しかし、第一イザヤの当時、この「若枝」が後の救い主メシアの意味を持っていたかは疑問です。ヒゼキヤのように期待の家に若くして王となった人物を指していただけかもしれません。いずれにしてもイスラエルの大きな期待がかかった王のことです。これを「王的メシア」と言います。

26:14には「死人は生き返りません。 死者の霊はよみがえりません。 それゆえ、あなたは彼らを罰して滅ぼし、 彼らについてのすべての記憶を 消し去られました。」とありますが、ここは義人と悪者を対比し、悪者の結末について語ったのであって、のちに問題となる「復活」について述べたところではありません。また、「よみがえり」の話は、体をとった復活のことでここで言う「死者の霊」のよみがえりとは、異なります。霊のよみがえり、のことであれば、新旧約聖書で否定されたことはありません。このあとの26:19では「あなたの死人は生き返り、 私のなきがらはよみがえります。 さめよ、喜び歌え。ちりに住む者よ。 あなたの露は光の露。 地は死者の霊を生き返らせます。」と言われており、こんどは「死者の霊」の復活が言われています。

そして40章で第二イザヤとなります。この40章は「慰めのメッセージ」と言われています。40:1-5をお読みします。「「慰めよ。慰めよ。わたしの民を」と あなたがたの神は仰せられる。/「エルサレムに優しく語りかけよ。 これに呼びかけよ。 その労苦は終わり、その咎は償われた。 そのすべての罪に引き替え、 二倍のものを主の手から受けたと。」/荒野に呼ばわる者の声がする。 「主の道を整えよ。 荒地で、私たちの神のために、 大路を平らにせよ。/すべての谷は埋め立てられ、 すべての山や丘は低くなる。 盛り上がった地は平地に、 険しい地は平野となる。/このようにして、主の栄光が現されると、 すべての者が共にこれを見る。 主の御口が語られたからだ。」」 とあります。「荒野に呼ばわる者の声がする」は新約聖書では、バプテスマのヨハネのことを指していますが、神様がこの世に現れること即ち神顕現の道を整える者のことです。そのあとをみるとそれは第二イザヤ自身を指している、と解釈されます。また9節には「シオンに良い知らせを伝える者よ。 高い山に登れ。 エルサレムに良い知らせを伝える者よ。 力の限り声をあげよ。 声をあげよ。恐れるな。 ユダの町々に言え。 「見よ。あなたがたの神を。」とあり、ここで「良い知らせを伝える者」はギリシャ語訳で「yu:angerion」であり、新約では「福音を伝える者」です。これは「神の国到来の福音を伝える者」ですから即ち主イエスということになります。しかし、このイザヤ書の文字に忠実に見る限り、第二イザヤを指しています。預言はこのように、直接的には目の前の具体的な何かを意味しつつも、将来の何かを指し示す、というものです。但し、新約のなにかの出来事と直線的に結びつけると、そのことがらの持つ歴史的深みが失われてしまいますので、注意しなければなりません。イスラエルの民の言語に絶する苦悩の中で培われた希望が新約の時代に事実となりこの世に現実化した、と理解すべきで、その苦悩の歴史をすっとばした短絡的な解釈は望ましくありませんし、枝葉末節の所での相違について延々とした議論になりかねません。思想の地下水として理解すべきです。

この第二イザヤの中心的メッセージは「僕の歌」です。本日の聖書箇所は「第四の僕の歌」の前半部分です。第四の歌はそれまでの三つの僕の歌と比較しても極めて独自です。ではまず第一の僕の歌を見ます。42:1-4です。「見よ。わたしのささえるわたしのしもべ、 わたしの心の喜ぶわたしが選んだ者。 わたしは彼の上にわたしの霊を授け、彼は国々に公義をもたらす。/彼は叫ばず、声をあげず、 ちまたにその声を聞かせない。/彼はいたんだ葦を折ることもなく、 くすぶる燈心を消すこともなく、 まことをもって公義をもたらす。/彼は衰えず、くじけない。 ついには、地に公義を打ち立てる。 島々も、そのおしえを待ち望む」とあります。この僕はだれでしょう。主なる神に選ばれ、公義を齎す者でありながら、叫ばず、声を上げず、ちまたに声を聞かせない人物です。かとはいっても、葦を折って棄てる訳でもなく、くすぶる燈心を消してしまうのでもなく、遂にはそのつぶやきが大きくなり地に公義をもたらす、と言われています。つつましやかな態度でこの世に臨みますが地に公義を打ち立てるのですから大いなる勢力を持つに至る人物です。第二イザヤの言葉に忠実に従う王、即ち理想の王、というところです。ヒゼキヤも当初はイザヤの言葉に忠実だったのですが支配者の立場からエジプトと手を結ぼうとするなどイザヤの忠告に反することになってしまいました。したがって、ここでの僕は「理想の王」というのが妥当です。

「第二の僕の歌」は49:1-6です。「島々よ。私に聞け。 遠い国々の民よ。耳を傾けよ。 主は、生まれる前から私を召し、 母の胎内にいる時から私の名を呼ばれた。/主は私の口を鋭い剣のようにし、 御手の陰に私を隠し、 私をとぎすました矢として、 矢筒の中に私を隠した。/そして、私に仰せられた。 「あなたはわたしのしもべ、イスラエル。 わたしはあなたのうちに、 わたしの栄光を現す。」/しかし、私は言った。 「私はむだな骨折りをして、 いたずらに、むなしく、私の力を使い果たした。 それでも、私の正しい訴えは、主とともにあり、 私の報酬は、私の神とともにある。」/今、主は仰せられる。 －－主はヤコブをご自分のもとに帰らせ、 イスラエルをご自分のもとに集めるために、 私が母の胎内にいる時、 私をご自分のしもべとして造られた。 私は主に尊ばれ、 私の神は私の力となられた。－－/主は仰せられる。 「ただ、あなたがわたしのしもべとなって、 ヤコブの諸部族を立たせ、 イスラエルのとどめられている者たちを 帰らせるだけではない。 わたしはあなたを諸国の民の光とし、 地の果てにまでわたしの救いを もたらす者とする。」とあります。「あなたはわたしのしもべ、イスラエル」と言っていますから、素直に読めばイスラエル民族が主の僕、と読めます。「イスラエル」という言葉はヤハウェ―信仰共同体の個人、例えば王とも考えられますが、5節では主の言葉として「イスラエルを集める」と 言っていますので、集合体としてのイスラエル民族を指す、と考えるのが自然です。しかも、そのイスラエルは「諸国の民の光」となると言われています。イスラエルの民が諸国を救う者となる、というのです。但し、文法的に「あなた」というのは単数であることは留意する必要があるかもしれません。これと関連し、ユダヤ教には僕の歌の「僕」は個人であり、かつ共同体である、という集合説というのもあります。ユダヤ人はこの2つを分離して考えない、というのです。ここで「イスラエル」と言う時はイスラエルの信仰共同体を指しますが、第一の僕のように国王個人を指していると考えられる時はイスラエル共同体を代表する王個人を指す、と理解するのです。そうかもしれませんが、なにか釈然としない、ものが残ります。

第三の僕の歌は50:1-9がその箇所ですが4節以降をお読みします。「 神である主は、私に弟子の舌を与え、 疲れた者をことばで励ますことを教え、 朝ごとに、私を呼びさまし、 私の耳を開かせて、 私が弟子のように聞くようにされる。/神である主は、私の耳を開かれた。 私は逆らわず、うしろに退きもせず、/ 打つ者に私の背中をまかせ、 ひげを抜く者に私の頬をまかせ、 侮辱されても、つばきをかけられても、 私の顔を隠さなかった。/しかし、神である主は、私を助ける。 それゆえ、私は、侮辱されなかった。 それゆえ、私は顔を火打石のようにし、/恥を見てはならないと知った。/私を義とする方が近くにおられる。 だれが私と争うのか。 さあ、さばきの座に共に立とう。 どんな者が、私を訴えるのか。/私のところに出て来い。/見よ。神である主が、私を助ける。 だれが私を罪に定めるのか。 見よ。彼らはみな、衣のように古び、 しみが彼らを食い尽くす。」とあります。ここは文脈から言って、第二イザヤ自身をさしているにちがいありません。6節に「打つ者に私の背中をまかせ、 ひげを抜く者に私の頬をまかせ、 侮辱されても、つばきをかけられても、 私の顔を隠さなかった。」とあり、苦難に耐え忍ぶ預言者の様が描かれていますがその彼を神は助ける、との救いの言葉が続きます。苦難の状況が放置されず、神の力が臨む、ということを言って希望のメッセージになっています。この侮辱に耐える「僕」の姿は、イスラエルの王にはそぐわない、と言わねばなりませんが、イスラエル共同体を指しているという解釈は十分可能です。イスラエルの民は北イスラエルの滅亡と民の離散という、既に苦難の歴史に入っていますので、その民が行くところで諸国民の侮辱の対象となっている、という理解はおかしくありません。事実、ユダヤ人の歴史は今に至るまで、「諸国民の侮辱」の中にあったとさえ言えます。

そして、問題の第四の僕の歌です。これは52:13-53:12までであり章をまたがっています。52:13-15は53章の僕の歌の結論を要約したもの、と解釈されていますので、あとにまわし、53:1-6をお読みします。「私たちの聞いたことを、だれが信じたか。 主の御腕は、だれに現れたのか。/彼は主の前に若枝のように芽ばえ、 砂漠の地から出る根のように育った。 彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、 私たちが慕うような見ばえもない。

/彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、 悲しみの人で病を知っていた。 人が顔をそむけるほどさげすまれ、 私たちも彼を尊ばなかった。/まことに、彼は私たちの病を負い、 私たちの痛みをになった。 だが、私たちは思った。 彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。/しかし、彼は、 私たちのそむきの罪のために刺し通され、 私たちの咎のために砕かれた。 彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、 彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。/私たちはみな、羊のようにさまよい、 おのおの、自分かってな道に向かって行った。 しかし、主は、私たちのすべての咎を 彼に負わせた。」とあります。ここに示された僕は「苦難の僕」と称せられています。先ほど「侮辱に耐える預言者」のイメージが僕の詩（うた）の僕にはある旨を申しましたが、ここで述べられている苦難の僕は単に「侮辱に耐える」というにとどまりません。まず、3節後半で「彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、 私たちが慕うような見ばえもない。」といわれており、見た目が醜い、ということもにおわされています。52:14では「多くの者があなたを見て驚いたように、 －－その顔だちは、 そこなわれて人のようではなく、 その姿も人の子らとは違っていた」と言われています。「そこなわれて人のようではなく」から推測すると、顔と体が崩れている、と思われ、所謂癩病ではないかという想像をさせます。かつて聖書で癩病と訳されていたのは今我々が言うハンセン氏病より広い意味であり、白い瘡蓋（かさぶた）が体に出来る病気で、神の呪いの象徴と考えられていました。今、新改訳聖書ではツァラート、新共同訳聖書ではギリシャ語でレプラと訳されています。このレプラが癩病、ハンセン氏病をさし、伝染病として世界中で恐れられた病気をさすようになったのです。ツァラート自身は伝染病として恐れられたという表現は全くなく、むしろ宗教的意味で毛嫌いされたのです。この苦難の僕の場合は、顔や体の形が崩れることからして重病のハンセン氏病と言うことではないかと思われます。

　次に重要なのは「さげすまれる」にとどまらず、私たちは、彼は神からの罰を受け苦しんでいるのだ、と理解し、私たちも彼を尊ばなかった、ということです。実はそれは我々の罪をになって彼が苦しみを受けているというのです。これは代理贖罪の考え方です。歴史的には、同害報復の考え方の流れの中で罪なき者が殺人者の罪を負い、死に至る、というものです。生贄の考え方に通じるものですが、人の命をいけにえにすることは厳禁されていますから、この代理贖罪によって命を奉げた僕という考えは、イスラエルの伝統的信仰からはおかしい、と思われます。むしろ、この僕は罪多きイスラエルの民と苦難を共にし、イスラエルの救いのためにとりなす者となったため、神の怒りを全面的に受け、命を取り上げられた、と理解すべきでしょう。生贄の発想とは異なる、と思います。また代理、というより、とりなす者・代表として罪による罰を受けた、というべきです。僕が罰を受けたため、イスラエルの罪はなきものとされた、ということです。これは新約の民である我々が主イエスの十字架を考える上で大切なことです。我々の罪が無くなった訳ではなく、なきものとされたのです。「ああ助かった」と言って喜んでいればよい、という訳にはいきません。それに伴う使命が与えられています。僕は神の救いを断たれた絶望に落ちなければなりません。それは詩篇22編の最初に出てきます。22:1です。「わが神、わが神。 どうして、私をお見捨てになったのですか。 遠く離れて私をお救いにならないのですか。 私のうめきのことばにも。」とあります。この絶望の叫びは十字架上の主イエスの七つの言葉の一つです。とりなしの祈り、というのも単なる仲介者の祈りと言うのではなく、自分を奉げる祈りである、ということも心にとどめ置きたい、と思います。

　もう一点、苦難の僕の特徴をあげますと、暴虐に対しても全く従順のように見えることです。むしろ、彼が痛めつけられるのは神の御心だというのです。そして僕は悪者のうちに数えられ、神に背いたもの即ち大罪人にされる、というのです。12節の最後に「背いた人たちのためにとりなしをする」と言われています。この執成しは、結果は命を奉げることであり死です。人間は死んでから、何らかの形で皆からほめたたえられる、ということであれば、命を差し出すこともあるでしょう。結果としてデマゴーグであることが解りましたが、特攻隊の人間や、玉砕者のなかには本当に「国のため、家族のため」ということで死んでいった人もいたと思います。自分の死が役に立つと信じたから命を差し出すことができたのです。全くの絶望しかないところで命を差し出す、というのはとても人間社会ではあることではありません。イスラエルの民にとって「神の怒り」により罰を受けると言うことは文字通りの絶望であり、死後の世界で神様がなんとかしてくれるだろ、というようなものではありません。霊肉ともに永久に死滅することなのです。

　53章をみると、絶望・滅亡でおわりますが、53章の要約として掲げられた52:13では最初に「見よ。わたしのしもべは栄える。 彼は高められ、上げられ、非常に高くなる。」と言われ、救いが見えます。53章で神の怒り、絶望・滅びに置かれた苦難の僕を神は大いなるものとされた、解釈することもできなくは有りません。「苦難と高挙」として後の教会での正統的解釈となりました。53章の最後は、とりなしのことについて書かれていますが、その絶望・破滅を神様が救うとか、ましてや、「非常に高い」ところに置かれる、即ち、神のそばにあげられるようなことはありえない話です。52:13は53章の苦難の僕として描かれていることを越えており、要約には全くなっていません。「苦難の僕」の叙述からは外した方がよいくらいです。「僕」を光輝ある者とするための解釈的付加との解釈が納得的です。「苦難の僕」の、他の僕の詩（うた）との比較における独自性、さらには、メシア思想の歴史の中での画期的意義という見地から考えると、絶望・破滅で終えることに大いなる意味があります。もし、死後に神様が栄光ある立場にさせてくれることを知っているのであれば、この代理贖罪はその深刻さを失います。詩篇22編との関連で言えば、この詩編の後半部分の神による絶望からの救いを期待しているのであれば、贖罪行為も愛国者の「お国のため」と同じことになってしまいます。「苦難の僕」は絶望・滅亡の定め、でperiodです。あとは「神のみぞ知る」の話です。

　最後の僕の歌は61:1-3です。「神である主の霊が、わたしの上にある。 主はわたしに油をそそぎ、 貧しい者に良い知らせを伝え、 心の傷ついた者をいやすために、 わたしを遣わされた。 捕らわれ人には解放を、囚人には釈放を告げ、/主の恵みの年と、われわれの神の復讐の日を告げ、 すべての悲しむ者を慰め、/シオンの悲しむ者たちに、 灰の代わりに頭の飾りを、 悲しみの代わりに喜びの油を、 憂いの心の代わりに賛美の外套を 着けさせるためである。 彼らは、義の樫の木、 栄光を現す主の植木と呼ばれよう。」とあります。僕になっているのは預言者第三イザヤです。「悲しむ者に喜びを」という言葉で要約されます。マタイ5:4「 悲しむ者は幸いです。その人たちは慰められるから。」が思い出されます。しかし、ここには「苦難の僕」はありません。油注がれた「わたし」は「貧しい者に良い知らせを伝え、 心の傷ついた者」ですがその代わりに、神の怒りを身に受ける結果になっている訳ではありません。非常に美しいイメージの僕です。なお、「主の植木」という表現は旧約聖書でここだけです。

　こうしてみると、第一の僕の歌から第五の僕の歌を概観して、第四の僕の歌、「苦難の僕」は極めて独自な性格を持っています。この五つの僕の歌を通して、ここに述べられている「僕」はいったいだれなのか、という議論は、2千年来議論されてきていますがいまだ決着はついていません。個人か集団か、個人としても歴史上の人物か、理想化された人物か、または第二イザヤ自身をさしているのか、また集団であったとして、それはイスラエルの民全般か、それともイスラエルの残された者のような信仰集団なのか、更には第二イザヤを含む預言者集団のことか、等、多様な説があります。個人であり、集団でもある、という中間的な説もあります。ユダヤ教の伝統は、僕はイスラエル民族のことだ、というものです。第二の歌にあるようにイスラエルは「諸国民の光」となるべく、彼らの罪を負う存在だと言うことになります。第四の歌に当てはめると、ユダヤ人は世界中に散らされ、その地の人々を救うために自らは犠牲になる事をいとわない民である、ということになります。再びエルサレムに集められると言うのは精神的・霊的意味でのことです。極端な形で歴史的事実に適用すると、ナチスのホロコーストはユダヤ人が人類の罪のために生贄となったことを示しており、それは神の御心であった、という理解になります。一言で言うと「すさまじい」解釈になります。

　この第二イザヤにおける「苦難の僕」は新約聖書において主イエスの十字架として具体化するまでどのようになっていたのでしょうか。地下水として流れていたのでしょうか。第二イザヤはBC６cの半ばですから、5百年以上の時代差があります。預言書のなかにゼカリヤ書という文書があります。旧約と新約を繋ぐ文書として有名です。時代はBC6c後半であり、第二イザヤの少しあとで第三イザヤと同時期と推察されています。旧約聖書の後ろから二番目の文書です。この文書には所謂メシア的表現が多数あります。そのうち、いくつかのメシア表現は「苦難の僕」を連想させます。一か所だけ見てみます。12:10をお読みします。「わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと哀願の霊を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見、ひとり子を失って嘆くように、その者のために嘆き、初子を失って激しく泣くように、その者のために激しく泣く。」とあります。ここに「自分たちが突き刺した者」という表現がでてきています。この「わたし」は預言者ゼカリヤです。このあとに有名な「嘆きの詩（うた）」が続きます。人々により「突き刺される」メシアです。また、旧約外典と言われ、我々の聖書即ちユダヤ人の聖書には載っていませんが、カソリックの聖書には含められている「知恵の書」という文書があります。これは箴言のような表現の文書であり、ソロモンが語った、とされています。BC2-1cのプトレマイオス朝エジプト・アレキサンドリヤにおけるユダヤ人社会における文書と考えられています。その5:1-6をお読みします。「裁きの時、神に従う人は、／大いなる確信に満ちて立つ。彼を虐げ、彼の労苦をさげすんだ者どもの前に。/彼らはこれを見て大いなる恐れに捕らえられ、／思いもよらぬ彼の救いに茫然自失する。/彼らは自分たちの考えの誤りに気づき、／胸をかきむしりながら、嘆いて言う。/「この者を、かつて我々はあざ笑い、／愚かにも、ののしりを浴びせた。その生き方を狂気のさたと考え、／その死を恥辱と見なしていた。/それがどうして神の子らの一人となり、／聖なる人たちの仲間に加わったのか。/我々はまことの道を踏み外した。義の光は我々の上に輝かず、／太陽も我々のためには昇らなかった。」とあります。おそらく、イザヤ書の「苦難の僕」のことが念頭にあるのだと思われます。ユダヤ人の罪の自意識として苦難の僕の記憶はずっと生き続けていた、と考えられます。威勢の良い、王的メシアの裏側にこの「苦難の僕」のメシア像が生き続けていたのです。

　キリスト教就中ローマ・カソリックの伝統は主イエスの予型である、という解釈です。宗教改革者もこの点に関する理解は基本的に同じです。これはメシア説と言うこともできます。第二イザヤの時代には新約の時代のようなメシア像は明確にはなっていませんが、第二イザヤの「主の僕」は、王なるメシアと苦難のメシアが裏腹になっているようなメシアです。新約のメシア像は主イエスの役割に対応し、王的メシア、預言者的メシア、祭司的メシアが一体となったもの、と言われることが多いのですが、「苦難の僕」は敢えて言えば祭司的メシアの一つの形、ということができるでしょう。神への執成しの役割をこの「苦難の僕」がはたしているのですが、そのために自らを犠牲にし、神の怒りをなだめる贖罪の供え物になる、という「すさまじい」執成しです。「苦難の僕」の思想がイスラエルの信仰の一水脈となり、神の新しい契約の証としての主イエスにおいて具体化したということになります。あまりにも主イエスの生涯と十字架・復活の話が似ているので、ローマン・カソリックのように旧約であらかじめ述べられた者というような機械的あてはめの如き理解が権威づけされました。プロテスタントにおいても同様な考えの教会が沢山あります。アメリカの福音派のようなグループの、主イエス像は王なるメシア一色です。代理贖罪のことは言っていてもそれは苦難の僕のような謙虚な、力なきメシアではありません。“神が私を本当に見捨てるかもしれないがそれでも私は神に信頼する”という苦難の僕の理解にはこの人々は程遠い人たちだ、と言わざるを得ません。その結果、自分たちを義の民と理解しているのです。罪の中にありながらも、主イエスの故に罪なき者とされたのだという謙虚さが感じられません。正直、我々と同じように「福音派」などと言っているのはやめてほしい、と思います。主イエスの福音とは全く異なり、自らを正義の使者としている者です。

　新約聖書ではイザヤ書と詩編からの引用が多いのですがこの「苦難の僕」の引用は使徒の働きのところにあります。8:31-35にあるピリピの伝道の話のところです。「すると、その人は、「導く人がなければ、どうしてわかりましょう」と言った。そして、馬車に乗っていっしょにすわるように、ピリポに頼んだ。彼が読んでいた聖書の個所には、こう書いてあった。 「ほふり場に連れて行かれる羊のように、 また、黙々として 毛を刈る者の前に立つ小羊のように、 彼は口を開かなかった。/彼は、卑しめられ、そのさばきも取り上げられた。 彼の時代のことを、だれが話すことができようか。 彼のいのちは地上から取り去られたのである。」/宦官はピリポに向かって言った。「預言者はだれについて、こう言っているのですか。どうか教えてください。自分についてですか。それとも、だれかほかの人についてですか。」ピリポは口を開き、この聖句から始めて、イエスのことを彼に宣べ伝えた。」とあります。引用されたのはイザヤ書53:7-8の一部ですが 、新改訳聖書で比較すると若干言い回しが異なっています。ギリシャ語聖書で比較するとピタリと合うことからして、新約の使徒たちがギリシャ語聖書に親しんでいたことが想像されます。ここで注意すべきは、①福音書には苦難の僕の引用は全く現れない点です。主イエスは自らを苦難を受ける人の子と表現してはいますが、「苦難の僕」と直接つなげている表現はありません。主イエスが苦難の僕の箇所を知らなかったはずはありません。むしろ自らの使命について「秘密のこと」として隠していた、と理解するしかありません。弟子たちは主イエスの生存のあいだは、王的メシアの思想のとりこになっていました。②次に重要なことは異邦人の知識人の質問に使徒が答える形で苦難の僕の箇所の解き証しがされていることです。ユダヤ人にとってもこの「苦難の僕」の箇所はよく知られた箇所ではあったと思われます。主イエスを十字架につけたユダヤ人からしても使徒たちからしても、具体的な人間をあの見た目にも醜く救いようのない「苦難の僕」になぞらえるのは憚られたのだと思います。また自分たちを救いようのない罪人である、ということを認めることですから、ユダヤ人の間では、公然と「苦難の僕」の箇所の引用はしてはならない、ことになっていたのであろう、と思われます。そうとしてしか考えられません。そのくらい、描写された「苦難の僕」のありようはユダヤ人にとってみればひどいものなのです。

　その「苦難の僕」が霊のからだを持ってこの世に復活され、我々と共にいらっしゃる、というのは何と言うことでしょう。しちめんどう臭い解釈問題のいくつく先も、ここに到達できなければパズルの循環にあることと変わりありません。祈ります。

（ご在天の父なる御神様、今日のひと時を感謝いたします。今日は、イザヤ書の「苦難の僕」を学びました。イザヤの時代から培われた「苦難の僕」による救いは王的メシアの裏に隠れ、目だたないものでしたが、新約の時代となり、主イエスその人がこの「苦難の僕」となり、我らの罪の執成しの業をなされました。これにより、神様は我々を罪なきものと取り扱われ、神の国のメンバーとさせて下さいました。福音に感謝申し上げます。我らの主イエス・キリストのみ名により祈ります。アーメン）